

みんなで広げる
福祉の輪

令和3年度

福祉ポスター・標語・作文

入選作品集

福祉月間 9月15日水~10月15日金



相模原市



ごあいさつ

相模原市長 本村 賢太郎

相模原市では、「みんなで支えあい 地域の力が育む 人にやさしいまち さがみはら」を地域福祉の基本理念として掲げ、誰もが周囲とのつながりを持ち、相互に関わりあって暮らせるまちづくりを目指しております。

こうした中、毎年9月15日から10月15日までを「福祉月間」と定め、小・中学生及び青年を対象に福祉に関するポスターや標語、作文を募集しており、今年も多く作品が寄せられました。

昨年来、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、特に今年の夏は、変異株の感染拡大により、市民の皆様、子どもたちの生活にも大きな影響がありました。寄せられた作品からは、社会に広がる閉塞感を吹き飛ばすような、前向きで熱い力が感じられました。相手の気持ちを考えることの大切さ、笑顔や優しさで人と人とがつながる必要性など、より良い社会にしたいという熱意に、未来を担う若い世代への頼もしさを覚えるとともに、心温まる思いがいたしました。

この作品集は、最優秀・優秀に入選した作品をまとめたものです。これらの作品が、福祉の輪が広がるきっかけになればと考えております。

結びに、ご応募いただきました皆様にご心からお礼申し上げますとともに、市民の皆様には、一人ひとりがかけがえのない個人として尊重され、お互いを認め合う共生社会の実現に向けて、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

福祉ポスター

小学生の部

最優秀 えがおで毎日

南大野小学校

2年

横山

千奏

P3

優秀 えがおをとどけよう

鶴の台小学校

1年

小野寺華凛

P4

優秀 幸せを呼ぶ福祉

鶴の台小学校

3年

金

祉頻

P4

優秀 ヘルプマーク知ってますか。

南大野小学校

4年

目代茉莉子

P5

優秀 少しの勇気で笑顔は生まれる

くぬぎ台小学校

6年

岡野

楓

P5

優秀 みんなで笑えば世界は幸せ

若草小学校

6年

川谷内龍吾

P6

福祉ポスター

中学生の部

最優秀

見つけてほしい
あなたの側の
助けあいの印

鵜野森中学校

3年

岩根

乃瑛

P9

優秀

支え愛 助け愛
信じ愛 認め愛 譲り愛

中央中学校

2年

臼井

彩華

P10

優秀

共に生きる

相陽中学校

2年

塚田

珠央

P10

優秀

優しさは一番の贈り物

鵜野森中学校

2年

日吉

結穂

P11

優秀

未来のための一歩

鵜野森中学校

3年

眞分

香凜

P11

優秀

僕の仕事は君の笑顔を守ること

東海大学付属
相模高等学校
中等部

3年

宮川

陽菜

P12

福祉ポスター

青年の部

最優秀

このマーク、
知って動いて援助して

光明学園
相模原高等学校

2年

清水しみず

七海ななみ

P15

優秀
福祉って？

光明学園
相模原高等学校

1年

勝山かつやま
このは

P16

優秀
思いやりのディスタンス

東海大学付属
相模高等学校

2年

川端かわばた

柚大ゆうた

P16

優秀
バリアを壊そうー住みよい町へー

東海大学付属
相模高等学校

3年

高橋たかはし

花佳はるか

P17

福祉標語

【対象】
小学生

最優秀

広げよう
やさしい笑顔とよりそう心

双葉小学校

6年

村上

千晶

P21

優秀

ちいさな手
2人でつなげば大きな手

双葉小学校

1年

水川

凜子

P22

優秀

あいさつは
気持ちをつなぐまほうの言葉

若草小学校

4年

吉田

光希

P22

優秀

「助けて」と
言えない気持ち気付いてる？

田名北小学校

6年

鈴木優梨亜

P23

優秀

すぐそこで
あなたのやさしさまっている

共和小学校

6年

内藤

楓

P23

優秀

悲しい気持ちはよりそって
うれしい気持ちは分けあおう

若草小学校

6年

吉田

歩叶

P24

福祉作文

【対象】
中学生

最優秀 障がい者の生きがいとは。

相模原中等
教育学校

3年

荒俣

侑来

P27

優秀 すべての人が
平等で幸せに過ごすために

相陽中学校

1年

小山

優音

P29

優秀 一条の光

相模原中等
教育学校

3年

荻野

美空

P31

優秀 私がこの夏に思ったこと

相模原中等
教育学校

3年

土内

怜奈

P33

優秀 世界の児童労働

相模原中等
教育学校

3年

松沼

芽依

P34

優秀 伝統文化と
最新技術でより良い福祉を

相模原中等
教育学校

3年

三浦

航大

P35

優秀 多様性を認め合う

相模原中等
教育学校

3年

山田

莉子

P36

福祉ポスター

小学生
の部



えがおで 毎日



小学生の部

最優秀

南大野小学校 2年

よこ やま ち か
横山 千奏



小学生の部

鶴の台小学校 1年

優秀

おの でら かりん
小野寺華凜



小学生の部

鶴の台小学校 3年

優秀

きむ じ びん
金 祉頻



小学生の部

南大野小学校 4年

優秀

もく だい ま り こ
目代茉莉子



小学生の部

くぬぎ台小学校 6年

優秀

おかの
岡野

かえで
楓



小学生の部
優秀

若草小学校 6年

かわやちりゅうご
川谷内龍吾

福祉ポスター

中学生
の部





中学生の部
最優秀

鵜野森中学校 3年

いわね のえ
岩根 乃瑛



中学生の部
優 秀

中央中学校 2年

うす い あや か
臼井 彩華



中学生の部
優 秀

相陽中学校 2年

つか だ み お
塚田 珠央

優しさは一番の贈り物



中学生の部

優 秀

鵜野森中学校 2年

ひよし ゆほ
日吉 結穂

中学生の部

優 秀

鵜野森中学校 3年

ま わけ か りん
眞分 香凜





東海大学付属
相模高等学校中等部 3年

みやがわ ひな
宮川 陽菜

福祉ポスター

青年
の部





青年の部
最優秀

光明学園
相模原高等学校 2年

しみず ななみ
清水 七海



光明学園
相模原高等学校 1年

青年の部
優秀

かつ やま
勝山このは



東海大学付属
相模高等学校 2年

青年の部
優秀

かわ ばた ゆう た
川端 柚大



東海大学附属
相模高等学校 3年

たか はし はる か
高橋 花佳

福祉標語

【対象】

小学生



最優秀

広げよう

やさしい笑顔と

まじりこみ

双葉小学校 6年

村上 千晶

優 秀

ちいさな手

2人でつなげば

大きな手

双葉小学校 1年

みず かわ りん こ
水川 凜子

優 秀

あいらつは

気持ちをつなぐ

まほうの言葉

若草小学校 4年

よし だ こう き
吉田 光希

優 秀

「助けて」と言えない
気持ち気付いてる？

田名北小学校 6年
すずき ゆりあ
鈴木優梨亜

優 秀

すぐそりで
あなたのやさしさ
まっすぐに
まっすぐに

共和小学校 6年
ないとう かえで
内藤 楓

優 秀

悲しい気持ちはよりそって
うれしい気持ちは分けあおう

若草小学校 6年

よし だ あゆ か
吉田 歩叶

福祉作文

【对象】

中学生



最優秀

障がい者の生きがいは。

相模原中等教育学校

3年

荒俣あらまた

侑来ゆうら

私には視覚障がいを持つ祖父がいます。祖父は生まれつき網膜色素変性症を患っていて、四十三歳の時に全盲になりました。網膜色素変性症は現代の医学ではまだ治療法のない難病です。祖父は私が生まれてから一度も私の顔を見たことがありません。そんな祖父ですが、いわゆる障がい者の概念をくつがえすような人物です。祖父は人と話すことが大好きで、知識や話題も豊富で、会話をしているとても楽しいです。また、六十歳を過ぎてからマラソンをはじめ、東京マラソンに挑戦したり、地域の障がい者の会の代表を務め、行政との橋渡しをしたりもしています。さらに、「いのちの電話」で多くの人の悩みを聞くボランティアも行っています。私たち家族も祖父といると視覚障がい者であることを忘れてしまうほど、エネルギーに満ちていて明るい人です。

私は身近に障がい者がいることが、彼らの日々の生活や思いを知る良い機会であると考え、改めて祖父から話を聞いてみました。それにより、私は世間の障がい者に対する「ハンディキャップがあつてかわいそう」などというイメージとは違う障がい者の姿に気づきました。そして、彼らがよりよく生きられる社会とはどのようなものか改めて考えてみました。

祖父のような障がい者は一人では出かけられないなど、日常生活に不便を強いられることが多くあります。しかし、祖父によるとハード面では多くのことが改善されてきているそうです。例えば、

視覚障がい者用の音声ソフトをパソコンに入れることで、インターネット上の情報にアクセスしたり、メールのやりとりをしたりできるなど、様々なツールが開発され、また、ヘルパーさんのサポートや福祉タクシーを利用して様々な場所へ出かけることができるなど、利用できる制度も増えてきているそうです。ソフト面でも前向きな変化がたくさんあり、最近では街の中でも困っていると声をかけて助けてくれたり、電車で席を譲ってくれたり、障がい者をサポートしてくれる人が増えているそうです。昔と比べると障がい者を取りまく環境は格段に良くなっていて、体に不自由はあっても、よりよい日常生活が送れるようになってきているそうです。

その一方で、障がい者自身がこういったツールや制度を活用するために、自ら情報を集め、申請をしなくてはならないという現実があります。受け身で待っているだけでは必要な情報を教えてもらえないという問題は残っています。制度はあってもそれを知らずに使えていない人もまだまだたくさんいるのです。祖父は自分もそういった人たちと行政との橋渡しができたらと思っているようです。実際に、祖父にパソコンを教えてくれたのも同じ視覚障がいを持つ若者だったので、障がい者同士のネットワークがいかに大切かが分かります。また、目が悪い自分でも悩んでいる人のつらい気持ちを聞くことならできるからと長年続けている電話相談のボランティアも、祖父のライフワークになっていっています。

こうして生き生きと日々を過ごす祖父の姿を見てみると、障がい者はただ助けてもらわなければいけない人たちなのではないというように感じます。障がい者であっても健康者と同じように社会生活において居場所があり、存在意義を感じられること、社会にどう貢献していけるかを考えられることが彼らの望む生き方なのではないか、と思います。障がい者であっても、ハンディキャップがあることからたらされる生活の困難というものがあっても程度は軽減され、

日常生活が送れるようになった上で、自分の日常を楽しみ、さらに誰かの役に立ちたいと考えられること。これが最終的に彼らが求めている生き方なのではないでしょうか。そしてさらに考えてみると、こういったことを自分の生きる意味であると考えられることは、障がい者でも健常者でも同じです。障がい者は、私たちよりも生活に不自由なことはありますが、生きていくなかで一人として求めるものは同じなのです。それぞれの障がいに合わせて適切なサポートが受けられるようにし、その上で彼らにもそれぞれの形で貢献してもらうことのできる社会が私たちがこれから目指すべき社会のありかたなのではないでしょうか。社会生活のなかで、自分の存在意義を見出すこと、誰かの役に立つことは誰にとっても難しいことです。それでも障がいのあるなしに関わらず、多様性を認め、みんなが生きる意味を感じられることが幸せなことであると思います。障がい者にとってよりよく生きるとは何かを考えてきましたが、それは人がよりよく生きるとは何かという問いと同じなのではないでしょうか。障がい者がよりよく生きられる社会とは、かかえている日常生活の不自由さが取り除かれたうえで、さらに自分らしく生きることができるような社会なのです。



優秀

すべての人が平等で幸せに過ごすために

相陽中学校 1年 小山^{こやま}優音^{ゆね}

「ハンセン病・隔離」という文字が新聞記事を読んでいるときに目に入ってきた。「隔離」という言葉にひきつけられて印象に残っているが、自分には全く関係の無い話だと思い記事のことはすぐに忘れてしまった。国語の授業で人権作文を書くことになり、テーマを探しているときに、ハンセン病の患者に対する隔離はなくなったものの、今でも周りの人からの偏見に苦しみ社会に復帰できていない人がいることを知った。偏見や差別は人権を侵害していることになる。新聞記事を見ていたにもかかわらず、この現状を初めて知ったということは、このときの私は苦しんでいる人たちの人権を無視していたということだ。これは差別を認めてしまっていることになる。同じ人間として、人権問題は一人一人が考えていかなければいけないことだと思う。なので私は、なぜ患者、元患者への差別が起きてしまうのか、どうすれば苦しむ人がいなくなるのか。このことについて考えていきたいと思う。

まず、偏見の元となっているハンセン病とは何なのか。ハンセン病とは皮膚と末梢神経を主な病変とする感染症でらい菌が原因となっている。感染経路は発病に繋がる感染原菌を多く持っている未治療患者からの飛沫感染といわれている。以前までは治らない病気として恐れられ感染者は療養所で隔離されていたが、今では特效薬によって完治することが分かり、感染力も極めて低いため強制的に隔離されることはなくなつた。それなのに今でも偏見や差別を受けている人がいるのはなぜなのだろうか。それは、治らない病気としてのハンセン病がまだ新しい情報と入れ替わっていないからではな

いのか。ハンセン病について正しく知れば偏見的な見方も少しは変わってくるはずだと思う。

もう一つ偏見的な見方をされて苦しんでいる人がいる病気がある。HIVウイルスが原因菌となっている「エイズ」だ。エイズは免疫力を破壊する病気です。今のところ治療法が見つかっていない。治療法が見つかっていないということからウイルスに感染することをおそれ、人々は感染者を差別的な目で見てしまっていた。しかしHIVは基本的に血液や精液、膣分泌液に多く含まれているため、主な感染経路は性的接触、血液感染、母子感染の3種類である。つまり、もし周りにいる人がHIVに感染したとしても、うつる心配はほぼないというわけだ。

このように恐ろしいと思われるいた病気も正しい情報を知ることができれば怖がらずにすむのだ。では何故、正しい情報を知らないまま偏見や差別などをしてしまうのだろうか。正しい情報を知ろうとしないわけではないのではなく、自分の知っていることが正しいと思っただけではないのか。私がハンセン病やHIVについて詳しく知る前はハンセン病はずっと治らない病気だと思っていた。しかし、今考えてみると自分だつて対策をしていないし、感染者だつてかかりたくてかかったわけではないということに気がついた。人は機会があれば間違えに気づくことが難しいのだ。ということは、気がついた人からどんどん広めていけば、理解してくれる人も増えるのではないか。世界中の全員が協力をし理解しあえば、偏見や差別をなくすることができるのではないか。つまり自分自身が意識をするだけでたくさんの人の人権を守ることができるとだ。

このような問題は新型コロナウイルスが流行している現代社会でもおこっていることだ。感染者本人だけでなく、その人の家族や住んでいる地域まで巻きこまれ、悲しい思いをしている人がたくさんいるのだ。これ以上苦しむ人を増やさないために、一人一人が病気について

正しく理解し、支え合っていけば、お互いが悲しい思いをせずには
と私は思う。世界中の人が偏見のない世界で幸せに過ごせるようにす
るために、まずは私自身が積極的に理解を深め伝えていく。そして、
改めて人権とは何なのかもう一度よく考え、自分にできることを探し
ていく。自分も人間である以上、「人権」とは永遠に関わっていくもの
なのだ。すべての人が平等な立場で過ごることができるように、他人
のためにも、自分のためにも、人権についてももっとと深めていけ
たら良いと思う。



優秀

一条の光

相模原中等教育学校

3年

荻野おぎの

美空みそら

「日本が世界一なことって何だろう」ぼんやりとソファに座りオリピックを見ていた私にふと、こんな疑問が浮かびました。日本はいろいろなところで活躍していますが、全体的に一位というのはあまり聞いたことがありません。スマホに手を伸ばし「日本、世界」と調べてみると、その結果の一つに「長寿」というワードがありました。私は日本が長寿大国で少子高齢化が問題となっているなどのことは当然知っていましたが、世界一ということには少々驚きました。そして「高齢者の人口では何位なのか」という新たな疑問が浮かび調べてみると、なんと世界一だったのです。もしかしたらこれは常識なのかもしれませんが、私はあまり興味を持っていませんでした。せいか全く知りませんでした。上位だろうとは考えていましたがまさかの一位だとは思っていませんでした。驚いた私はある大きな問題を感じました。それは、介護についてです。高齢者が多いということは介護が必要な人も多いということです。今あなたが、あるいはあなたの親が介護する立場になったら、快く引き受けることができますか。継続できますか。

私の父方の祖父は八十歳を超えていて、昨年「要介護」と診断されました。要介護とは簡単に言うと日常的な動作において介護を要する状態のことです。その際私の祖父は一時的に入院することが決まりました。後で祖父から聞いた話によると入院生活はとても辛かったようで、これから入院するという選択肢は自分の中でないと

いうことでした。特に今はコロナ禍で入院している患者さんが自由に院内を歩くことは許可されていない場合が多く、少し認知症の症状もあった祖父が病室から出ることは基本的に禁じられていました。家族が面会に行くこともできず、心配して父が送ったメールに早く退院したいと返信があったこともありました。そんな中、事情があり祖母や叔母が介護することが難しかったため、退院後は父が祖父の家に泊まって介護することが決まり、父とほとんど会えない生活が待っていると覚悟しました。

私の話をここまで読んで、重い気持ちになった方が多いのではないのでしょうか。これから自分が介護する立場になったらどうしよう、される側になったらどうしよう、将来に不安を感じた方も多いと察します。さらに追い打ちをかけるようですが、特に核家族化も進むこの世の中で、子供に迷惑をかけたくない、子供がいない、という理由で高齢者が高齢者を介護する老老介護、一人で自分の症状を見ないフリをする、ひどい場合には孤独死といった様々な問題があります。それに自ら助けを求めたり、自ら老人ホームへ入所したり、自ら入院を望んだり、といった高齢者の方がほとんどいないことは想像できるでしょう。それならどうすればよいのか、介護する側もされる側もいい気持ちを保てる方法はないのか。私にひとつ、提案をさせていただきます。

それは、訪問介護、ホームヘルプサービスをお願いするということです。訪問介護とは、介護福祉士やホームヘルパーが自宅まで来て、入浴、排泄、食事などの介護や掃除、洗濯、調理などの援助などのお世話をするサービスです。このことで高齢者は一番安心できる自宅で、十分な介護を受けることができ、入院や老人ホームへの入所の必要がなくなるのです。活用の仕方として例えば家族が仕事で出ている間のお世話をお願いするという利用方法があります。私の祖父も訪問介護をお願いしていて、父がリモートワークをしてい

る間にヘルパーさんが祖父を見ていてくれ、食事は祖父と父の二人分作ってくれるため、父は短い昼休みに昼食を作る必要がなくなり、祖父との会話の時間も増やせたと喜んでいました。また父が私たちの家に帰ってきやすくなり、そのことによって祖父の罪悪感も減ったようで、それに伴って症状もよくなってきたそうです。さらに祖父の入院前の介護疲れで鬱病となっていた責任感の強い叔母もヘルパーさんに任せるところは任せられるようになり、再び介護に関わってくれるようになりました。

このように、私たち家族にとって訪問介護はまさに救世主でした。父は今もお祖父の家で暮らしていますが、祖父は劇的に症状が良くなり、今は全員が心を開き協力して介護をしています。たまにリモートで話す祖父も元気そうで全てがよい方向に進んでいるように思えます。もちろんどんな場合も訪問介護で全てがうまくいく訳ではありません。しかし、訪問介護は少しでも必ず介護をいい方向へ導いてくれます。ここまででつまり私が言いたいのは、訪問介護こそ今の日本に必要なということ、介護を乗り越える家族にとって欠かせない存在だということです。



優秀

私がこの夏に思ったこと

相模原中等教育学校

3年

土内つちうち

怜奈れいな

私は障がい者の方に対しての理解を広げていくべきだと考えている。

毎年24時間テレビが放送されている。今年はパラリンピックも開催された。それぞれで障がい者の方が活動していたりスポーツで活躍したりしているところを見られる。

どうしてこういう場が設けられているのかを考えた。そして、障がいについて考えるきっかけが少しでも増えるようにし、理解を深めるためだと思った。実際に私は、ハンディを背負いながらも一生懸命に生きる姿を見て、自分はどうなんだと見つめ直す機会になった。

次にパラリンピックや24時間テレビを見る人は、障がい者についてどんなことを感じるのだろうか。私は家族や友人に聞いてみた。ある人は「自分が知らなかったことをたくさん知ることができた。パラリンピックでは、オリンピックと変わらないほど白熱して、興味が湧いた。」と言っていた。これはとてもプラスな感じ方である。また別の人は、「障がい者を見て自分になくてよかったと思った。少しかわいそうな気持ちになった。」と言っていた。これには差別的な要素があり、マイナスな感じ方である。このマイナスな感じ方は決して「悪い」とは言い切れないが、共感はできない。

そこで私は、なぜこのような感じ方になるのかを考えてみた。

まず一つ目は、周りに障がいを持った人がいるという経験をしたことがないということ。このことによって、「他人事」という考え

になると考えた。

次に二つ目は、一つ目と関連して、全く知らない障がいへの無意識な警戒感が働いてしまうのではないかということ。これについては障がい者について知るまでに、私にもあったことだ。私は小さい頃保育園の先生に教えてもらうまで、かわいそうだな、と自分で遠ざけて思っていたことを覚えている。

ここまでの二点は、その人の環境による「偶然」が引き起こしてしまっている。

次に三つ目は、障がいという事柄への想像力が足りていないということ。この点に関しては、他の点と違って障がいについて認識しているにもかかわらず理解していない、本人の興味が影響している。

ここまでのことをふまえて、私には何ができるのか。それは、パラリンピックや24時間テレビなどで知れることを周りの人に伝えるということだと思う。私が保育園の先生に教えてもらって知って興味を持ったように、誰かが率先して知らない人に伝えれば、知識や理解が広まっていくと考えた。また、他の人に知識を伝えるには、自分をもっと詳しく知らなければいけない。だから、障がいや障がい者の方について勉強して、自分から伝えられるようになるうと思う。

最後に、世の中にはパラリンピックや24時間テレビの舞台に立てる障がい者の方もいるが、立てない方の方が多い。そういう方達まで理解が広がって、差別のようなことが起きないで幸せに暮らしてほしい。そのために私たちは理解し、伝えていくべきである。

優 秀

世界の児童労働

相模原中等教育学校

3年

松沼

芽依

今、世界の子供達の苦しい現状について知っている人はどのくらいいるのでしょうか。世界中で約一億六千万人、子供の十人に一人が児童労働に悩まされています。児童労働とは、義務教育を妨げる労働や法律で禁止されている十八歳未満の危険・有害な労働のことを指します。ではその内容をくわしく見ていきましょう。

児童労働が起きてしまう原因は国や地域の状況によりませんが、もとを辿れば貧困がそのひとつであると考えられます。

ガーナのゴッドフレッドさんは七歳で父親を亡くし九歳から力カオ農園で働くようになりました。朝五時、誰よりも早く目を覚まし力カオ農園に向かいます。集めた力カオは頭の上に乗せて運ぶため全身が痛みます。その上、病気になるっても、疲れても、休みたくても言い出すことができない環境でした。ゴッドフレッドさんは二〇一〇年に来日し、当時のことを「他の子とは違い、自分は働かなければいけないことを悲しく思っていた」と言います。

エマヌエルさんとステファンさんは住み込みで力カオ農園で働いていました。雇い主は親と知り合い、暮らしぶりを心配して「学校に行かせてあげるから」と言って二人を力カオ農園に連れて行きました。しかし実際は学校に一度も行かせてもらえず、電話番号を書いた紙をなくしてしまったため家族とも連絡が取れず、朝から晩まで炎天下の中ひたすら働かされる日々でした。このように親元から引き離して無理やり働かせることを人身売買と呼びます。これも児童労働のひとつです。

シャンティさんはインドの方です。五歳の頃から綿花畑で働いていま

した。朝早くから夜遅くまで、日中は強い日差しの中二ヶ月間休みなしで腰をかがめて作業をしました。学校には行ったことがありません。作業をしている途中、農薬を吸ってしまい頭痛や腹痛、皮膚病になったりして何度も病院に通いました。そんなつらい思いをしても一日中働いて約百八十九円しかもらえていませんでした。そしてシャンティさんは農薬の影響によって血液の癌で亡くなりました。女の子は特に結婚持参金のために働かされるケースが非常に多いのです。では、どうしたら児童労働で困っている子たちの力になれるのでしょうか。

ひとつの方法にチョコレートを買って応援できる方法があります。森永製菓の商品である「ダース」というチョコの売り上げの一部を募金する取り組みがあり、商品を購入することで応援に貢献することができます。集められた募金で教材を買い、その教材を使って教育を受けることで成人後、不安定な仕事に就く確率がより低くなるようにと願った取り組みです。そのような子が増えれば、将来その国の経済がまわるようになり社会福祉が充実する可能性が高いです。そうして好循環が生まれるかもしれません。

また、フェアトレードという方法もあります。フェアトレードとは、発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することで、立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す運動です。これを児童労働が多いアフリカ、南アジアあたりの国と行うことで相手の収入が安定して、そのお金が子供達のために使われれば未来は少しずつ明るくなっていくと思います。

まずは世界の現状を知ることが大切です。学校に行きたくても行けない、朝早くから働かされる日々、労働が原因で亡くなる子、これらのことがどれほど悲しくつらいことなのかをもっとたくさんの人が理解するべきだと思います。そこではじめて自分に何ができるかを考えられるのではないのでしょうか。私はこの作文を通じていろんな人が児童労働について興味を持ち、減らすための努力をしてくれたら嬉しいです。

優秀

伝統文化と最新技術でより良い福祉を

相模原中等教育学校 3年 三浦航大

私は幼稚園の年長から、自分の住む地域で阿波踊りというものやっています。阿波踊りは徳島が発祥ですが、今では全国各地で踊られています。私の住む相模原市でもたくさんの人によって踊られています。その阿波踊りの活動では、障がいを持つ人や高齢の方と関わる事が多く、その経験から私は伝統文化を生かした福祉を日本は目指していくべきだと思います。

ではなぜそう考えたのか。まずは私が阿波踊りで経験してきた3つのことを紹介したいと思います。

一つ目は、連内での支え合いです。連とは踊りの一グループのことです、私が所属する連はとても規模の小さい連ですが、小さな子供からお年寄りまでの幅広い年代の人が所属していて、普段はなかなか関わらないような人ともコミュニケーションをとることができます。そんな連の中で、練習では中高生が小学生や幼稚園に通っているような子供たちに踊りを教えたり、踊りの本番であるお祭りなどでは、お年寄りのメンバーも含めみんなで協力して踊りきるという場面が今まで何度もありました。このような支え合いは、阿波踊りを続けてきたからこそ、経験できたと思います。

二つ目は、毎年開催される地元のお祭りの「にわか連」での経験です。にわか連とは普段から活動している連とは別で、当日参加で誰もが踊りに参加できる連のことで、私も今の連に入る前は何度もお世話になり、そこでの経験がきっかけで今の連に入りました。にわか連にも私たちの連と同様に様々な年代の人が参加しますが、時々車いすに乗った人など、

体が不自由な人も参加していて、そんな人たちとも共に踊ることができるとのがにわか連の魅力だと思います。今の連に入る前はそのような人たちと共に踊る経験が、そして入ってからはそのような人たちに踊りを教えるなど、少し連に所属する前とは違った経験ができました。

三つ目は、踊りを見せることで多くの方々に喜んでもらえたり、元気を届けられたりしたという経験です。夏の地元のお祭りでは、一部の踊り場所には車いす席があり、近くの老人ホームから職員の人と共に見に来てくれる人がいます。そんな方たちに踊りを見せると、「元気をもらったよ」という風に声をかけてくれたり、大きな拍手をしてくれて、元気を届けると同時にたくさんの方々の元気をもらうこともありました。また、お祭りの時だけでなく、連で老人ホームを訪れた時も、多くの方に喜んでもらえたと思いますし、私もたくさんの方々のパワーをもらいました。

このように、阿波踊りを通して、体の不自由な人や高齢の人など様々な人との関わり、とても良い経験となりました。その中で、私はこのようなことは阿波踊りだけでなく、日本にある他の多くの伝統文化にもできるのではないかと思います。特に日本の伝統文化は衰退の一途をたどっていて、福祉と伝統文化を上手く組み合わせることで、より良い福祉と伝統文化の復活、この両方を目指すことができると思います。また、伝統文化は体の不自由な人だけでなく、その人たちを献身的にサポートしている家族や老人ホームの職員の人などにも元気と感動を届けることもできると思います。

ただ、新型コロナウイルスの影響で、お祭りが中止になったり、老人ホームの訪問の取りやめなどで、パフォーマンスを生で見てもらう機会はほとんどなくなってしまうかもしれません。ですがその中でも、最新技術を用いたオンラインという新たな形であれば、今までの交流を続けていくことができると思います。そして、伝統文化と最新技術を組み合わせることにより、より良い福祉が生まれると思います。

優 秀

多様性を認め合う

相模原中等教育学校

3年

山田

莉子

多様性とは何か。多様性を認め合うことはなぜ大切なのだろうか。ふと、そんなことを疑問に思ったことはないだろうか。実際わかっている人も多いのではないかと思う。この疑問から私は、多様性を認め合うことから生まれるしあわせについて考えてみることにした。

多様性を認め合うということを世間が掲げているということは、そのように考える大きなメリットがあるのだと思う。そこで私は多様性を認め合うことのメリットを二つ考えた。一つ目は、物事を正しく認識することができるということだ。例えば、同じような考えを持った人でグループがつけられたとする。その場合、議論はスムーズに進むだろうが、最終的に出来上がったものはあまり良くないと思う。その理由は、視点が足りなかったから。物事を正しく理解ができておらず、問題点に気づくことができなかったのだ。一方、様々な意見を持った人が集まった場合だと、色々な方向から意見が飛び交い議論は長引くだろうが最終的には、抜けた部分のないものがつくられるだろう。つまり、物事を正しく認識して問題などに気づくために多様性が必要なのだ。二つ目は、多様性があることで私達がより良いものへと進化することができるということだ。一つの視点からしか物事を見ることができなければそこから前に進むことは難しい。つまり、多様性を失ってしまうと私達は進化していくことができないのだ。しかし、このように言っても行動に移せていないのが現状だ。

多様性について考えると、LGBTや黒人差別、女性蔑視など様々なワードが出てくるがその内一つに障がい者というワードも出てくると思

う。日本には約七八八万人障がい者がいると言われている。その中で労働可能人口は三三四万人で、一般企業で働いている人は十四パーセントである。実際は、多くの企業では依然として障がい者雇用の取り組みに積極的とは言えない状況が続いているのだ。

そこで、考えてほしいのが社会のための人ではなく、人が中心の社会を実現することが一番重要なことなのではないかということだ。社会は本来、人を幸せにするためにかたちづけられたものだ。ところが、いつの間にか社会を維持するための人になってしまっている。今ある社会が前提とされ、そこに適応できない人が悪いという考え方がシステム化しているというのならば、改める必要があると思う。社会にはもともと多様な人達がいて、その一人ひとりがきちんと幸せになれる社会をつくる。そのことを忘れてはいけないと私は思う。

しかし、そんなに簡単には社会をつくりなおしていくことは難しいだろう。それでも、多様性を認め合うことは大切だということを掲げているのであれば、ある程度知っておくことも必要だと思う。その積み重ねで、一人ひとりが多様性についてを理解していく。そして、多様性を力に変えていくことができるような社会をこれから私達がつくっていくことこそが、最初にも提示した多様性を認め合うことから皆のしあわせへとつながるということではないだろうか。



相模原市 地域包括ケア推進課

〒252-5277 相模原市中央区中央 2-11-15
TEL 042-769-9222 FAX 042-759-4395
E-mail hokatsucare@city.sagamihara.kanagawa.jp

発行：令和3年(2021年)11月